地域の目 Series 33

# ひと夏の「映画監督」体験

琉球朝日放送株式会社アナウンサー
三上智恵

「よーいッ、スターっ！」カチン。現場に緊張がみなぎる映画監督の一声。メガホンもって俳優、小道具・大道具、照明を意のままに操りイメージを出現させていく映画界の頂点。古今東西、監督の仕事に憧れる人は少なくないだろう。

それがこの夏、私は急遽「カントク」と呼ばれることになった。栄えある初の監督作品は、今年8月、いきなり東京で公開が始まった。初日から10日間、座席数は上映前に完売で嬉しい悲鳴。業界も驚く好調な滑り出しだった。

もしもこれが、私の好きなイタリア・フランス映画のような男女の機微を描いた作品なら、私は有頂天になっていただろう。でも残念ながらこの作品は、連綿と続く沖縄の苦悩と闘いを描いた、今すぐ全国の人に知ってもらわないとどうにも立ち行かないという切羽詰まったドキュメンタリーだ。

「標的の村」。6年前、オスプレイのヘリパッドに囲まれる運命と知った東村高江区の人々が、座り込んだところ国に訴えられ平和な暮らしが奪われていくという、現在進行形の実話。

北部訓練場に囲まれ、常にアメリカ軍の戦闘訓練に巻き込まれて生きてきた高江区。それはまさに戦後68年、過重な基地負担に耐えてなお、オスプレイの配備、辺野古の軍港を備えた基地建設と、さらに負担を増やされていく沖縄の縮図でもある。

沖縄ローカル放送局のQABが、なぜ劇場映画なのか？もちろん私たちには電波があり、スイッチ一つで家庭に届ける有利なポジションにいる。しかしながら30分のドキュメンタリーは全国ネットになっても、一時間作品になるとまず全国放送の枠がもらえない。高江区住民の裁判から、昨年10月、オスプレイ配備前の普天間基地封鎖の混乱までを30分で描くのは到底無理だ。いくつも賞を取って話題になれば突破口を開けないか？それもだめだった。その一方、違法ながら誰かがネットの動画サイトに載せた私たちの作品に3万回を超えるアクセスが殺到した。

「標的の村」に描かれた事実を見たいと思う人々が大勢いる。ローカルの電波は届かない。であれば、作品は出来上がっているのだから、全国津々浦々、見たい人がいる限りこちらから出かけて行って公民館なり劇場をお借りして見せて回ればよいではないか。シンプルにそう思った。

私たちは放送屋であると同時に、地域の歴史の記録者でもある。連綿と続く沖縄県民の権力との闘いの記録は、たとえそれぞれの場面で敗北に終わっても、先祖が闘った事実は子々孫々へ渡す財産である。もし私たちが蓄積した映像を、全国ネットの壁や放送法の規制を理由に、ただただ囲い込んで眠らせておくだけならば、地方局の報道マンとしての役割を半分も果たせないのではないか。

見渡してみると、東海テレビが、南海放送が、地域を這いずり回って長年にわたって築きあげてきたドキュメンタリー作品を劇場版として世にリリースしていた。これだ！と思った。地方局報道マンの意地にかけて、貴重な映像を世に出す突破口を探していたのは、当然、私だけではなかったのだ。

放送は一回きり。良くても再放送という運命の「ドキュメンタリー番組・標的の村」は、劇場版として息を吹き返した。単に報道部の仕事をまとめたディレクターであった私は、かくして「カントク」と呼ばれるに至った。

面はゆいながら、舞台挨拶なるものにも立った。そこで私はさらに衝撃を受ける。場内が明るくなっても、泣き続ける観客の多いこと。閉じた空間・大スクリーンで100人以上が同じものを目撃し、喜怒哀楽を共有していく。お互いの息遣いが感情の振り幅を増幅させていく、ライブ空間の凄味である。挨拶の間も、タオルで顔を覆ったまま顔を上げない高齢者の方も多かった。

沖縄問題に本土の人間は関心がない。テレビのこちら側でそうタカをくくっていた自分を恥じ入った。届いていなかったのだ。伝え手の努力が足りなかったのだ。映像を受け取る人々のビビッドな反応を目の当たりにする機会の少ないテレビマンが大きな勇気とエネルギーを得た、ひと夏の「カントク体験」だった。